

V 変化のあること

変化のあることは
回復の手段

一部屋あるいは二部屋に長い期間閉じ込められて、同じ壁、同じ天井、同じ周囲を眺めて過ごすことが病人の神経をどれほど苦しめるものか、それは、年配の看護師あるいは年配の患者以外の人にはまったく想像も及ばないことだろう。

神経衰弱を患っている病人よりも、激しい痛みの周期的発作をかかえている病人のほうがはるかに機嫌がよいということがよく言われるが、それは、後者の場合は発作のない期間を楽しめるためだとされている。私はこう考えたい。機嫌のよい患者の多くは、彼らの苦しみがなんであれ、一つの部屋に閉じ込められていない人たちの間に見受けられ、塞ぎ込んでいる患者の多くは、彼らの周囲の事物の単調さに長い間さらされてきた人たちの間に見受けられる。

神経機構にとってこれが苦痛であることは、21年間、「ポイルド・ビーフ」^{†1} 攻めにあったという兵士の場合のように、食物の長期にわたる単調さが消化器官に苦痛となるのと同じである。

美しいもの、変化に富んだもの、そしてとくに色の鮮やかさが病気に及ぼす効果についてはほとんど理解されてい

色や形も回復の手段

^{†1} 1861年刊の労働者階級向けの料理本の最初に、多人数のための経済的な食事としてこれが載る。塩漬け（鮮度を保つ方法）の牛肉を水からゆで、キャベツなどの野菜と練り粉団子を加え、煮込む。

ない。

このようなものへの渴望は、患者の「気まぐれな好み」だとふつう言われる。そして確かに、患者は二つの相矛盾するものを欲するなど、「気まぐれな好み」をもつことがよくある。しかし、彼らの（いわゆる）「気まぐれな好み」は、彼らの回復にとって何が必要かを示す非常に貴重なしるしであることが多い。これらの（いわゆる）「気まぐれな好み」をよく観察するとよいだろう。

（仮兵舎の）患者にとって熱病の最もつらい苦しみは、窓の外をみることができず、目に入るのは材木の節ばかりであることを私はみてきた（私自身が熱病患者であったときもそう感じたことである）。熱病患者が目の覚めるような色の花束をどんなに喜んだかを私は忘れない。（私の場合）野の花の小さな一束が私に届けられたとき^{†2}、その瞬間から回復がずっと速くなったことを私は覚えている。

この効果は気分だけのものだと人は言う。だが決してそうではない。その効果は身体にも及ぶ。物の形や色、光から私たちがどのような仕組みで影響を受けるのかについてはほとんどわからないのだが、それが実際に身体に影響を及ぼしていることは確かにわかっている。

患者の目に入るものの形の多様さ、色の鮮やかさは、回復の実際的手段である。

しかしそれは**ゆっくり**した変化でなければならない。例えば、患者に10枚も12枚ものリトグラフをたて続けにみせるとして、それで彼がぞくっとしてふらつく、あるいは

これは幻想ではない

^{†2} 1855年5月、スクタリ（現トルコ共和国ユスキュダル）からクリミア半島にはじめて渡ったナイティンゲールは「クリミア熱」に倒れ、現地の病舎で急性期を過ごした。